HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	トメアスーの教育と保育 ： 日系関連の教育施設を中心として
Author(s)	品川, ひろみ
Description	第3部 ブラジルとトメアスーの教育と保育
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 26, 123-132
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32560
Type	departmental bulletin paper
File Information	III_P123-132.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

トメアスーの教育と保育
――日系関連の教育施設を中心として――

品川ひろみ

はじめに

近年、日系ブラジル人のデカセギに伴って、日本国内の保育所や幼稚園には、多くのブラジル人児童が入所している。本研究グループでは、これまで国内において日系ブラジル人の児童が多く入所している保育所や、ブラジル人託児所を調査対象としてその現状をまとめてきた[1)]。

日本の認可保育所においてブラジル人児童は、入園当初は戸惑いながらも、日本文化に沿った保育を受けて日本語や日本の生活習慣に馴染んでいた。一方で児童の保護者は、わが子の日本文化の習得を好ましいと受け止めながらも、ブラジルに帰国した際に適応できなくなるのではという不安を抱いており、日本の保育所には概ね満足しながら、文化の違いに戸惑いを感じている面も見られた。

そこで、母国であるブラジルにおいて保育の現状を明らかにする必要を感じ、サンパウロ市を訪れ、日系人児童が多く入所する幼稚園や学校を対象にして教育や保育に対する現状を見てきた[2)]。

それらの調査からは、日本の保育とブラジルの保育では、施設や設備をはじめとして、保育の内容も異なっていることがわかった。具体的には大きく２つの違いがあった。まず１つ目は教育へのアプローチの仕方である。日本の保育所や幼稚園において就学前の幼児に対する教育は、遊びを中心としてそれを通して学ぶことを目的としている。だがブラジルでは、幼児段階でも学校教育と同様のカリキュラムのつくり方をしているという違いがあった。次に2つ目として、保育の環境が大きく異なっていた。日本の保育所や幼稚園では保育室や遊戯室、園庭など広い環境が保障されていることが多いが、サンパウロの施設ではセキュリティ対策のためか、高い塀などで囲まれ閉鎖的な印象であり、また施設の広さも日本に比べると小規模であった。

このように、これまで調査を行ったサンパウロの幼稚園では、ブラジルの保育の状況を見ることが出来たものの、それは大都会のサンパウロという土地柄による特徴と思われる部分もあった。

そこで本調査ではサンパウロから離れたパラ州トメアスーの幼稚園を見ることで、ブラジルの幼児教育についての共通項を整理し、ブラジルの保育の特徴を明らかにするとともに、地方でありながら、日本へのデカセギが多い地域の教育施設を見ることで、デカセギが子どもたちに与えている現状を明らかにしたい[3)]。

調査の概要

調査は2007年８月23日～24日　トメアスーの日系の教育施設（下記①④）と非日系の幼稚園（下記②③）２園を訪問し見学した。

① 日系学校　　ESCOLA　NIKKEI　DE　TOME-ACU
　調査の内容：施設の見学と教員との懇談

② 小規模幼稚園　ESCOLA　INFANTIL　SEMONTIHA
調査の内容：施設の見学
③ 公立幼稚園　　ESCOLA　PE BRUNO　MARCHETTI
調査の内容：施設の見学
④ 日系幼稚園　　ESCOLA　INFANTIL　ABC
調査の内容：施設の見学と園長へのインタビュー

第１章　トメアスー地域の教育施設

トメアスーには、日系人に関連する教育施設として、「Escola Nikkei de Tome-Acu」＝日系学校と、「Escola Infantil ABC」＝日系幼稚園がある。

前者はこの地域において日系人の中心的な組織である文化協会が経営に関与しているが、幼稚園のほうは日系人女性の個人経営であり、協会が経営に関与している訳ではない。また対象も特に日系人児童だけを対象としているのではない。そういう意味では、日系学校の方も、日系人児童の在籍は多いものの、日系人児童だけを対象とした学校ではなく、むしろブラジル人児童のほうが多い。

トメアスーには日系学校の他にも「ルッテラーナ」という教会系の私立学校があるが、それ以外は、公立の学校が一般的である。しかし公立学校は生徒数が多く、それに対応するだけの教員数ではないことや、教育環境の面でも恵まれているとはいえない。トメアスーに来る道中にもいくつかの学校を目にしたが、平屋の木造校舎であり大変簡素な建物に見えた。日系の学校のすぐ裏手にも公立の学校があったが、運動場は広いものの建物はけっして大きくなかった。

ブラジルでは一般に、公立より私立のほうが様々な面でよいと考えられており、サンパウロでも高額な授業料を払って私立学校に行かせている家庭が見られたが、ここトメアスーでも授業料が負担できる家庭は私立学校に行かせているようである。

一方幼稚園のほうは、公私合わせて13施設あるという。ただし幼稚園の規模は様々で、公立幼稚園のように児童数が多いところもあれば、一般住宅を保育室に改造した程度の小規模の幼稚園もある。13施設の公私の内訳は明確ではないが、学校と同様に公立は費用がかからず、私立は保育料が必要なことや、行われている保育の内容から、経済的に恵まれた、教育熱心な家庭は私立を選ぶ傾向があることはサンパウロと共通であった。

第２章　トメアスー日系学校

第１節　概要

日系学校は2002年２月に設立された。当時は高校１年生、２年生の45人だけであった。その後、2004年に民間の学校となり現在に至っている。

現在の生徒数は１年生から８年生と高校１～２年生までの138名、そのうちの36名、26.1％が日系の児童である。各クラスは８～10名程度と少人数で行っている。公立学校は1クラス50名ほどで

あるため、日系学校は、一人ひとりの子どもに目が行き届く人数であり、そのことも保護者に好感を持たれる理由である。

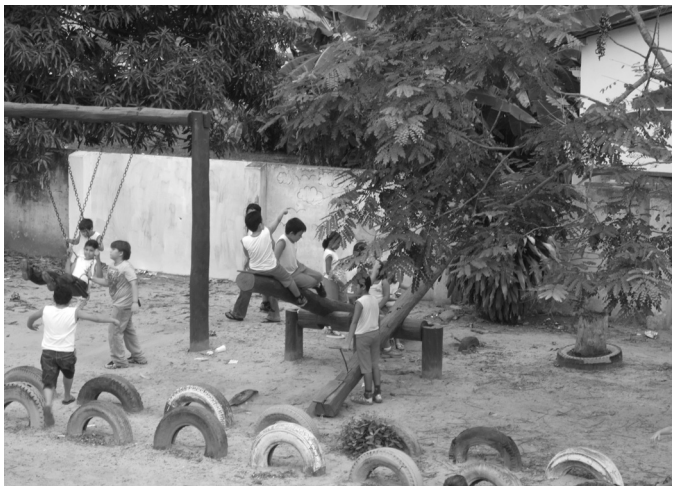
また現在は小学校１年生から高校２年生までの学年が揃っているが、低学年を受け入れるようになったのは、今年からだという。つまりスタート時は高校生だけであり、その後小学校高学年の児童も受け入れ、その後低学年というように段階的に対象学年を増やしていったという経緯がある。特に低学年児童の受け入れに関しては、教育制度の変更から、小学校入学年齢が１年早まったことに関連して要望があり実現に至ったようだ。

教員スタッフは17名となっており、その内訳は男性７名、女性10名となっている。校長のほかに教育コーディネーター１名、事務員２名、清掃員１名のスタッフで運営している。授業料は１～４年生までが100レアル　５～８年生は150レアル　高校生は160レアルである。

第２節　学校の様子

日系学校は文化協会から歩いて数分の場所にある。木造２階建ての小さな校舎である。校舎の正面には遊具が設置されていて、木製のブランコやシーソーなどがあった。また日本の学校でもよく見る、古タイヤを利用した遊具もあり、自由に遊んでいる子どもたちの様子は、日本の地方の小学校などで見られる光景に近い。

＜日系学校の前庭＞



校舎の入り口を入って正面には売店があり、お菓子などが販売されていた。日本の学校に比べて廊下などは多少狭く、建物自体も古い木造であるため、懐かしい印象を受ける。

学年別に編成されたクラスには、それぞれ10数名の生徒が在籍している。ほとんどの生徒たちは、ブラジルでよく見るタイプのＴシャツのユニフォームを着用しているが、生徒の中にはそれとは違うＴシャツの児童も見られる。またユニフォームの下はＴシャツに合わせた赤いパンツであるが、子どもたちの中にはＴシャツだけ着用して、下は他のパンツを着ている子どもも多い。

第３節　一日の流れ

ブラジルの学校は、一般的に午前と午後の２部制となっており、児童はそのどちらかに通学すればよいということになっている。ただし、サンパウロなどの日系人が経営する学校においては、日本式の朝から夕方までという授業時間も見られる。

ここトメアスーの学校は、ブラジル式の授業時間で、朝７：15から昼の12：45までとなっている。１コマの授業は45分となっており、１時間目から７時間目までであり、これが月曜日から金曜日までである。

表１は月曜日の高学年（５年生～高校生）の時間割である、左列が学年で行が授業時間である。

＜表１＞　月曜日の時間割

月曜日	1 7:15	2 8:00	3 8:45	4 9:45	5 10:30	6 11:15	7 12:00-12:45
５年生	ポルトガル語	ポルトガル語	理科	理科	地理	地理	—
６年生	アマゾンの勉強	アマゾンの勉強	ポルトガル語	ポルトガル語	理科	美術	—
７年生	理科	理科	ポルトガル語	ポルトガル語	英語	英語	—
８年生	英語	英語	アマゾンの勉強	アマゾンの勉強	ポルトガル語	ポルトガル語	—
高１	ポルトガル語	ポルトガル語	歴史	英語	英語	数学	数学
高２	歴史	歴史	数学	数学	作文	科学	科学

注目されるのは、一番上の学年を除き国語であるポルトガル語の授業が２コマずつ入っていることである（網掛け部分）。国語は科目の中でも重視されており、高校生以外は月曜以外にも取り入れられ、週に６コマ分が時間割に組み込まれている。また授業時間は１コマが45分と短いためか、２コマ続きの授業が多い。

第４節　デカセギ児童の現状

先に見たように、日系学校における日系人児童の比率は25%程度である。デカセギ帰国の児童は全てのクラスに各１名くらいは存在するということなので、日系児童のおよそ３割がデカセギによって日本から帰国していると見ることが出来る。

昨年、帰国して日系学校に入学した５年生の児童は、ポルトガル語が全く話せないため、友達も出来ず、学校生活について行けずに日本に戻ったという。このように日本に帰国するまでではなくとも、学校生活について行けない例は多いという。教員の話では、その理由として大きく分けて、①言葉　②学力の２点があるようだ。また言葉の中でも会話が難しく、そのため学習面でも算数はよいが国語の理解が難しいという。

特に４～５年生以上になると、ポルトガル語の習得に時間がかかるため、幼稚園に編入しＡＢＣから始め、はじめてついて行けるようになる例もあるという。さらに言葉の面だけではなく、文化の違いにも周囲の戸惑いが見られる。日本で生まれた子は、場所を考えずにゴミを捨てたりなどちょっとした行動の違いが目に付くようだ。

またデカセギの問題の中には、日本からの帰国児童ばかりでなく、留守家庭児童の問題がある。例えば、父親がデカセギに行き母親と祖母との３人で生活している15歳の児童の場合、父親は２年おきに帰国するが、日常の生活の中で父親が不在のため、不安定になり様々な問題が生じた。担任はその原因が父親の不在であることを察知して、担任が父親役割の一部をカバーし対応したという。このように、親と離れて暮らしている子どもは、現在のところ、大きな問題には至っていないが、友達関係は普通であっても、消極的であったり、１人だけぽつんとしていたりなど、気になる様子が目立っているようだ。

第３章　トメアスーの幼稚園事情

第１章でも述べたように、現在トメアスーにおいて幼稚園は13施設ある。

そこで本調査では、日系の幼稚園のほかに、比較対象として①公立の幼稚園②家庭的幼稚園の２つの施設を訪問した。本章では訪問した幼稚園の概要を述べる。

第１節　〈公立幼稚園〉　ESCOLA　PE BRUNO　MARCHETTI

トメアスーの公立幼稚園は郡立となっている。対象園はメインストリートから外れた古い公営住宅の一角にあったため、なかなかわかりにくい場所であった。園舎は木造平屋建ての大変簡素なもので、内部は一部屋根がはがれ、空が見えるような現状である。

しかしこの園に通所してくる子どもは多く、この日も半分以上の子どもたちは園外の行事に出ていたにもかかわらず、２クラスはびっしりだった。そのように児童数が多いのは、公立の幼稚園は保育料が無料なことがある。無料であっても保育の終わりには簡単な給食も支給されるため、多くの子どもたちが公立の幼稚園に通っている。

＜公立幼稚園＞

現在この幼稚園に入所している児童は250名、保育は午前クラスと午後クラスに分かれており、ほぼ半数の125名程度が午前と午後にそれぞれ通園しているという。それに対して教員スタッフは園長と秘書のほか、専任の教員が４名、補助が２名、調理員が４名と決して多いとはいえない。

保育時間は、午前の部は７時15分から11時15分まで、午後の部は１時15分から５時15分までである。月曜から木曜までは、１日１科目の学習を取り入れているが、金曜日はビデオや公園などに出向いていく曜日としている。訪問した曜日は金曜日であったため、ほぼ半数の児童が園外保育で不在であった。しかし園の物理的な環境が恵まれていないとしても、この地域の大多数の幼児はこのような幼稚園に通っているといえよう。

第２節　　＜家庭的幼稚園＞ ESCOLA　INFANTIL　SEMONTIHA

ここで言う家庭的幼稚園とは、一般住宅を改造した小規模な施設のことを言う。調査対象の園は閑静な住宅街の一角にあり、白い木製の柵で囲まれた平屋の建物であった。建物の前のエントランス部分には芝生があり、園児たちが遊んでいた。

＜家庭的幼稚園＞

家庭的幼稚園といっても、園の内部は、幼児用のイスや机を設置し、遊具なども置いている。けっして広くはないが、清潔で目が行き届いている印象を受けた。また、子どもやスタッフはお揃いのユニフォームを着ていた。訪問した日はブラジルの偉人の記念日であったため、歴史的なことを学びその後に関連するお菓子を食べるという流れだった。

規模は小規模であっても、行われる保育についてはプログラムを決めて計画的に行っているという。また小規模であるがゆえに、一人ひとりの児童に目が行き届くという面もある。入所している子どもの年齢は４歳から５歳であり、合わせて20名の園児が通っている。その内訳は、４歳が男児６名、女児９名、５歳が男児２名、女児３名となっている。20名の児童に対して、保育スタッフは園長と、補助のスタッフ２名で、全てブラジル人である。在籍する子どもは、ブラジルの児童が中心だが中には日系人児童もいる。保育時間は午前８：00～11：15までの午前保育である。

保育の内容を見ると、先の公立幼稚園と同様、月～木までは学習を取り入れており、金曜日だけは、おもちゃの持参を許可している。その日子どもは好きなおもちゃを持ってきて遊んだり、ビデオを見て過ごすことが出来る。また、この園では午前中の幼児の保育を終えた後、午後から小学生の子どもたちが勉強をしに来る、いわば学童保育的な機能も合わせ持っている。

このように家庭的幼稚園は小規模な環境ながらも、目の行き届いた保育を心がけており、その点がこの園の特徴といえる。

第３節　　＜日系幼稚園＞　ESCOLA　INFANTIL　ABC

日系人が経営する本幼稚園は、住宅街の一角にあり教会の施設を借用して行っている。建物は他の施設と同様平屋の木造であるが、保育室の数も多く園庭も広いなど、非常に恵まれた施設である。広い園庭にはガヴァやカシューナッツ、アサイーなどのトロピカルフルーツの木があり、ここがアマゾン地域であることを実感させるが、ブランコなどの固定遊具が設置されている様子は、日本の幼稚園の外観と非常に近い。訪問した時期はブラジルでは冬であったが、園庭で水遊びをしている子どもも見られた。子どもたちはお揃いのユニフォームであるＴシャツとパンツをはいている。他の園や学校と同じようなタイプで、白に黄色のトリミングのＴシャツと黄色のパンツである。足元を見ると、運動靴の子どももいるが、ほとんどの子どもは日本でいうビーチサンダル（ブラジルではゴム草履）をはいている。

＜日系幼稚園＞

この園には２歳児から６歳児まで合わせて49名が入園している。その内訳は表２に示した通りだが、このうち日系の児童はわずか５名と、１割程度の比率である。

この園児数に対して保育スタッフは、園長のほか４名の教員と２名の補助で対応している。４名の教員の中で２名は教員資格を持っているが、残りは持っていない。教員採用の基準は資格よりも、うまく子どもに対応出来るかということが重視されているようだ。

また、ブラジル国内の教育システムの変更により小学校入学年齢が１歳早まった。今年は移行期として、これまでどおり６歳児クラスがあるが、来年度そのクラスの児童は小学校入学時には２年生に入ることになる。それと同時にこの幼稚園では６歳児クラスは廃止する予定である。しかしそれでは１クラス減となり、経営的に厳しいため、来年度からは２歳児クラスを増やす計画だという。

＜表２　園児数＞

園児数	男児	女児	合計
２－３歳クラス	7	5	12
４歳クラス	12	6	18
５歳クラス	4	5	9
６歳クラス	6	4	10
合計	29	20	49

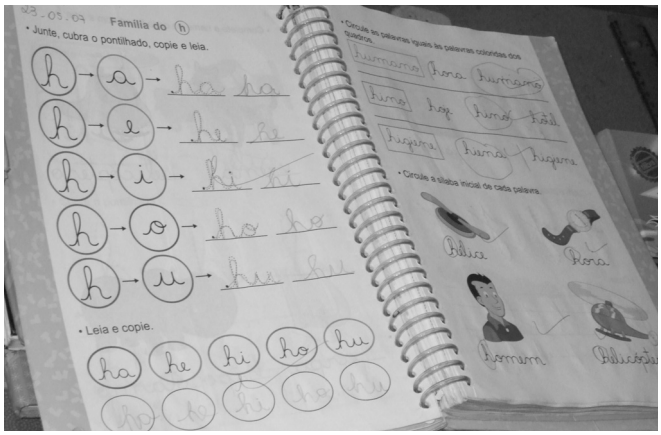
本園の保育料は全てのクラスで85レアルとなっている。これはトメアスーの幼稚園の中で最も高額であるという。保育料はそれぞれ１ヶ月近くある夏休み冬休みの際にも支払うことになっているが、休みの際も保育料が必要なことを伝えるのは難しいという。

また入園時の費用として他に教科書や制服などの用意もしなければならない。例えば教科書は年齢によって異なっているが、およそ45レアルから50レアル程度、園指定のユニフォームは上下で20レアルであり、１人２～３セット用意してもらっているという。

教育内容

保育時間は朝７時半から11時半までとなっており、前述した２園とほぼ同じである。本園の経営者である園長は、日本の幼稚園での研修経験を持っているため、日本の幼稚園と同様、遊びを多く取り入れている。しかしブラジルの一般的な幼稚園がそうであるように、すべての年齢で教科を意識した教育を行っている。具体的な教科としては、国語・算数・理科・歴史・体育・図工・英語・日本語と、小学校と変わらない内容になっている。また、保護者の要望もあり、年に４回は試験を行っている。試験といってもぬり絵をしたり、勉強したことを質問したりなどの簡単なレベルのものだというが、試験をすることで親の信頼を得られるという。

＜日系幼稚園の教材＞



また金曜日にはビデオを使った保育を行うこともあるという。ビデオは幼児教育用に作られたもので、「協力し合うこと」「健康と自然を大切に」「怖がらないこと」「一人ひとり違うこと」などのテーマに沿っている。

特にビデオのテーマにもある「違い」については、髪の毛、肌の色の違いなど具体的な話をしながら違いについての学習、いわば多文化についての保育を心がけているといえる。これは、この園だけでなくブラジルの幼稚園では一般的に取り入れられているという。

一日の流れを見ると、大きく２つに分かれている。朝は７時半に始まるが、登園するとまず学習の時間となっている。学習は９時まで行われるが、その後は子どもたちが楽しみにしているおやつの時間である。おやつの後は、各クラスごとにお絵かきをしたり、自由あそびなどが行われるが、６歳児クラスは本来１年生段階のクラスであるため、引き続き学習の時間となっている。また先に見た教科はすべての年齢のクラスで取り入れられている。

年間行事

幼稚園は２学期制であり、２月が新学期となっている。しかし日本の保育施設のように、入園式などの行事はない。先にみたように、保育の内容には教育が多く取り入れられており、日本の幼稚園とは異なっている。しかし年間の行事をみると、お誕生会やピクニック、ミニ運動会や父母会、クリスマスなど、日本の幼稚園と同じような行事も見られる。

＜表３　行事予定＞

	行事予定
２月	新学期
３月	お誕生会
４月	イースター　５～６歳の試験
５月	労働記念日・母の日
６月	お誕生会・試験・親子ピクニック
７月	夏休み（１ヶ月間）
８月	新学期・休園（パラの誕生日）
９月	お誕生会・休園（独立記念日）　試験
10月	ミニ運動会・こどもの日
11月	父母会・フィナード（お盆）
12月	クリスマス
１月	冬休み（１ヶ月間）

このように本園では子どもが楽しめる行事も多く、日常の保育も遊びを重視している。そのためこの地域では、「遊んでばかりいる幼稚園だと評判になっている」（園長談）が、一方では親の信頼も厚く、小学校を始めてほしいという要望もあるほどである。しかし経営者でもある園長は、今のところ小学校を開設するつもりはないと述べていた。

デカセギが与える影響

これまで在籍していた子どもの中にも、保護者のデカセギに伴って日本から帰国した子どもが多数いたという。今在籍している中では、①親がデカセギに行っている（この中には両親とも行っている場合と、父親だけがデカセギに行っている場合がある）。②祖母がデカセギにいっているという例も見られる。①の中でも両親ともデカセギに行っているため、祖父母と一緒に生活している子どもが２人いるという。また父親だけ行っている子どもも１人いるという。

それらの子どもたちは、祖父母が日常の世話をしている場合が多く、日本でデカセギをしている親からの仕送りで生活している。中には、仕送りが遅れているから月謝を待って欲しいということもあるようだ。保育者から見れば一緒に連れて行くほうがよいと思われるが、親たちは子どもを連れてデカセギに行くと、いろいろ経費がかかるという理由でブラジルに置いていくことが多いという。また近年では、祖母が日本にデカセギに行って、その仕送りで幼稚園に来ている例もあるという。

幼稚園においてデカセギの影響を考えると、児童への影響が最も多い。現在49人の在園児の中で気になる子どもを見ると、親が日本にデカセギに行っているため、親と一緒に住んでいない例が多く、親と離れていることの影響を感じているようだ。それに対して特別に何かの対策を立てている訳ではないが、その都度配慮した保育を行っているという。

またトメアスー地域において、日系人がデカセギに行くのは珍しくない。現に、以前本園で教員として働いていた先生も、現在日本にデカセギに行っているという。また園長自身も「なぜデカセ

ギに行かないか？」と聞かれることが度々あるなど、この地域においてデカセギはごく一般的な選択肢として、日常生活の中にあるのだといえよう。

おわりに
――トメアスー地域の幼稚園――

トメアスーの学校や幼稚園を訪問して、最初に感じたことはオープンであるということである。サンパウロの学校や幼稚園は、セキュリティが厳しく高い塀で囲まれた中で子どもが遊び閉ざされたイメージがあったが、ここトメアスーは恵まれた自然環境もあって非常に広々とした印象である。このオープンな雰囲気は学校や幼稚園だけではなく街全体にもある。この地域では子どもだけで公園で遊ぶことも一般的であり、訪問時も公園には沢山の異年齢の子どもたちが一緒に遊んでいた。

このように生活環境の面では、同じブラジルと言っても都会のサンパウロとトメアスーでは違う部分が多かった。しかし教育ということに限定すると、共通の部分も多く見られた。共通の部分としてはまず学校教育における公立と私立の違いがある。教育の環境や内容において公立より私立が勝っているため、教育費を払うことの出来る家庭の子どもが私立の学校や幼稚園に通っていることは同様であった。

また、幼稚園に限定した場合には、教育を重視している点がある。２歳から教科に沿った学習を保育の中に取り入れ、テキストを使用し学習することや、幼児であっても試験を行うことなどは、日本の一般的な保育施設では見られない。生活環境としてはゆったりしているトメアスーにおいても、保護者の教育に期待する意識は都市部と変わりないということがいえよう。

日系幼稚園の保育内容を見ると、遊びを重視する日本的なものと、勉強を取り入れているいわばハイブリッドな保育であると感じた。それは経営者でもある園長が日系人であることに加えて、日本の保育施設での研修経験を持っているからである。遊びを多用しながらもブラジル的な保育も重視している。またその中でも多様性を認める保育を意識していることは注目される。具体的に言えば、保育の中に、違いを伝える多文化の視点を取り入れている点である。しかしそれはこの園の特徴というよりもブラジルでは一般的に取り入れられているようだ。

最後にトメアスーにおけるデカセギの児童への影響を考えてみよう。日系学校と日系幼稚園では日系の児童以外の子どもが多く入所しており、日系人児童はわずか10%～25%である。しかし、限られた日系の児童の中でも、保護者のデカセギに伴って日本から帰国した児童や、保護者がデカセギに行っている例が確認された。保護者と離れて生活している児童の様子は、幼稚園でも学校でも不安定で気にかかる児童も多く、教員が個別に対応している例が見られた。日本においても日系ブラジル人児童の不安定さが指摘されているが、それはデカセギがその要因と見るよりも、ブラジル人児童だから、保護者が長時間労働だからという見方をされることが多い。しかし本国ブラジルにおいて帰国した後、あるいは保護者がデカセギで不在であることで、不安定な様子が見られることは、国籍の問題というよりも児童の生活環境にあるということが改めて認識された。そのことは、今後の日系ブラジル人児童の保育問題の中で重要な視点の一つであるといえよう。

このように今回の調査では、トメアスーにおける幼児教育の概観と、デカセギが子どもに与える

影響を見てきた。本報告は詳細な調査によるものではないため、不十分な点も多い。今後はこの結果にヒントを得ながら、日系ブラジル人児童を中心とした多文化保育のあり方を探って行きたいと考えている。

注

1）日本国内の日系ブラジル人保育に関する調査結果については、小内編（2003）および小内編（2007a）を参照のこと。

2）ブラジルにおける保育・教育施設の調査結果については、小内編（2006）および小内編（2007b）を参照のこと。

3）本研究はこれまで行った調査を基礎として、平成19年度から22年度にわたり、研究課題「日系ブラジル人児童を中心とした多文化保育の総合的研究」（研究代表者・品川ひろみ、課題番号19330123）として、新たに日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）を受けてスタートした研究である。

参考文献

小内透編著，2003,『在日ブラジル人の教育と保育－群馬県太田･大泉地区を事例として－』明石書店.

————，2006,『調査と社会理論・研究報告書21　日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室.

————，2007a,『調査と社会理論・研究報告書23　日系ブラジル人の労働－生活世界と地域住民』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室.

————，2007b,『調査と社会理論・研究報告書24　日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の諸相』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室.

（品川　ひろみ）